

## 『東京ブギウギと鈴木大拙』序章

著者	山田 奨治
図書名	東京ブギウギと鈴木大拙
開始ページ	11
終了ページ	17
出版年月日	2015-04-22
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1368/00006130/">http://id.nii.ac.jp/1368/00006130/</a>

## 序章

一九六六年七月一二日の未明、九五歳の鈴木大拙（本名・貞太郎、一八七〇—一九六六）は臨終の床にいた。大拙は前日に急な腹痛を起こして、北鎌倉の東慶寺の裏山にある、居所を兼ねた松ヶ岡文庫から築地の聖路加病院に、寝台タクシーで運び込まれた。仏教学者にして文化勲章受章者、日本の禅を世界に広めて「人類の教師」とも呼ばれた碩学が、最期のときを迎えようとしていた。

大拙の甥の長女に当たる林田久美野（旧姓・鈴木、一九一八—二〇一一）は、『大叔父・鈴木大拙からの手紙』（一九九五、以後『大叔父』）にそのときのことを克明に記している。緊急入院した大拙の周りには、呼吸を助けるための酸素 TENT が引かれていた。主治医は、のちに百歳の現役医師として有名になる日野原重明（一九一一—）だった。大拙はときどき目を開いては、何かをみようとしているかのようにだった。

急を聞いて駆け付けた見舞い客のなかに、西洋人風の面立ちの整った熟年男性がいた。大拙の養子・アランこと鈴木勝（一九二六頃—一九七一）である。

それは、久しぶりの父子の対面だった。アランはかがみ込んで、酸素テントの外から大拙に顔を近付けた。大拙の秘書の岡村美穂子（一九三五―）が呼び掛けた。

「先生、アランさんですよ。」

「おう、おう。」

大拙は酸素テントににじり寄り、手を動かした。

大拙はどんな気持ちで「おう、おう」と、うめいたのだろうか。そのときのアランのことばは遺されていない。いつまで病院にいたのかも、だれも知らない。主治医の日野原は、アランという男の存在そのものを記憶していない（日野原の秘書談）。

アランは無名のひとではなかった。戦後を代表する歌謡曲「東京ブギウギ」（一九四七）を作詞し、「スウィングの女王」と呼ばれた歌手の池真理子（一九一七―二〇〇〇）とかつて結婚していた。ところが、一時代を代表する歌を世に送り出したにもかかわらず、アランの記録は少ない。大拙にアランという養子がいたことについて、多くを語るひともいない。大拙の周囲にいる者にとって、アランは触れたくない存在になっていた。アランのことを「不肖の息子」と呼ぶひともいた。それには理由があった。アランは、分別盛りのはずの四〇歳代に、週刊誌沙汰になる事件の主役になってしまったのだ。

アランのことを孫引きでなく書いたひとは、そう多くはない。林田久美野の『大叔父』は、大拙

の近くに永く仕え、そしてアランの許嫁いいなれでもあったという著者によるものである。それだけに、アランについても大拙の私的な面についても、類書のないほど多くの証言を含んでいて、本書もそれを貴重な引用文献にしている。

久美野は同世代のアランを子どもの頃から知っていた。その久美野は、軽率ないい方は慎みたいとはしながらも、アランが道を踏み外すような人間に育ってしまったことは、「やはり家庭環境に問題があったと推察せざるを得ません」と書いている。当時の父親はだれも似たり寄ったりだったとしながらも、「自分の研究時間を削ってでも子供と遊んでやる、子供と接していて時を忘れるといった父親ではなかったと思います」とも久美野はいう。

研究者のほとんどは、アランのことを黙殺している。大拙をアランとの関係から考えようという意欲もない。そんななかで、仏教学者の横山ウエイン茂人（一九四八―）は、短いがかなり踏み込んだアラン評を書いている。

大人になってから、アランの多才な面が素晴らしく發揮され、優雅で自由な人となった。アランが父親である鈴木先生を尊敬し、大事にしてきたのに対し、鈴木先生はアランに対し閉鎖的な立場を取ったのは事実です。それは実に残念な事です。というのは、先生が自分の息子から「謙遜」の教訓を学び得たかもしれません。（松ヶ岡文庫編『鈴木大拙 没後四〇年』、以後、『没後四〇年』）

これは大拙の没後四〇年の記念出版物に収められた文章だ。横山はアランの人生を評価し、大拙

の父親業を批判しているとも受け取れる。横山は大拙の英文日記を翻刻した学者でもあり、松ヶ岡文庫が所蔵する一次資料に接する機会は、ほかの研究者よりも格段に多い。アランは大拙を尊敬していたのに、大拙は閉鎖的だったと、その横山が断言している。

大拙の弟子で小説家の岩倉政治（一九〇三—二〇〇〇）も、アランについて踏み込んだことを書いた、いや書くことのできたひとりだ。岩倉は大拙に請われて、手の付けられないワルになっていた思春期のアランの面倒をみていたのだ。その岩倉は、古田紹欽編『鈴木大拙の人と学問』（一九六一）に、つぎのように書いている。

先生がその後義絶されたアラン君のことについては、あまりふれたくはない。これは簡単にだれがわるいというようなことではなくて、世代と環境の悲劇とみるほうが正しいだろう。私はどちらに対しても気の毒なことだと思っている。

しかし先生のようなすぐれた人間形成の一見本である人物であっても、青少年の教育については、なかなか手に負えなかった、というきわだった事例がアラン君との関係であった。先生の苦悩のほどが思いやられた。

これは、大拙がまだ存命中の一九六〇年一月に執筆された文章だ。アランが一方的に悪いわけではなく、大拙にも否があるというニュアンスになっている。

久美野も横山も岩倉も、大拙は思うようには子育てができなかったという。では、大拙は息子に

対してどのように閉鎖的だったのか、どのような苦悩があったのかは、これらの短文からはみえてこない。それ以上にみえないのは、「不肖の息子」アランの苦悩である。

アランの記録は本当に少ない。もし彼が大拙の志を継こうとする子であったなら、もつと多くのことばがいまの世に遺されていたに違いない。

大拙が遺したことばは幾千万とある。全集だけでも四〇巻もあり、それに入っていない文献も相当な量あるとみられる。松ヶ岡文庫には、大拙の膨大な原稿や日記、蔵書がいまでも大切に保管されている。世界各地の図書館や個人のもとにある、未だ知られていない記録もあるに違いない。それらすべてをじっくり読もうとしたら、たとえ一生を費やしても時間が足りない。

饒舌な父よりも、ことばを遺すことができなかった息子の声が聴きたい。この破綻したようにみえる父子関係には、何か大事なメッセージが隠されているように思う。期待通りに育たなかった子に親はどう接するべきなのか——この普遍的なテーマに、大拙も苦悩していた。それを研究者は読み損なってきたのではないか。

臨済宗の高僧・西村恵信（一九三三—）は、大拙の優れた評伝『鈴木大拙の原風景』（一九九三）で、「およそ偉人の伝記は、その目撃者である直接の弟子たちによって記録されるのが常であるが、その場合、多く過大の粉飾がなされ、いたずらな神話化が行われるのが普通である。それらがもう一度非神話化されてこそ真に客観的な真実性が浮き彫りにされてくるというものである」と、弟子筋が書いた大拙伝を暗に批判している。大拙の門下ではない西村は、偉人の神話化に与しない立場を取りながらも、同書ではアランのことにはほとんど触れていない。大拙の半生を詳細に

復元した研究でありながら、西村がアランについて書かなかったのは、なぜなのだろうか。

ある人物をよき人間として描くためには、隠さなければならないこともある。世の大拙伝にとっては、アランがそれだったのかもしれない。しかしそれでは、大拙の生涯の大事な一面がみえなくなってしまう。アランの存在をしつかりとみすえることで、大拙の違った側面がわかるはずだ。大拙のことばの端々にあらわれていた、子への思いや悩みも浮き上がってくる。

禅宗、とくに臨済宗は、概して人情の機微や家族関係のことに弱い傾向がある。謎々のような公案で、論理的な思考を打ち破ろうとする。感情よりも理性を刺激するので、理屈っぽい西洋人をひきつける。

たとえば、『臨済録』には「父母未生以前本来の面目」という公案がある。「父母が生まれるよりもまえからある、本来の自分とは何か」を問うものらしい。本来の自分というものを、親の因果を越えて探せというのだから、やはり禅は親子関係に重きを置かない。夏目漱石（二八六七—一九一六）の小説『門』（一九一〇）には、この公案に悩む主人公が描かれている。漱石は、大拙と共通の師である禅僧・釈宗演（一八六〇—一九一九）から、この公案を与えられたことがあるのだろう。もちろん大拙も、この公案の境地は体験していたはずだ。

禅と親子関係について、仏教学者の末木文美士（二九四九—）は、『日本仏教の可能性』（二〇一一）につきのような感想を書いている。

『碧巖録』をずっと読んできて概して言えると思うのは、言語の問題を非常に深く追求してい

るのですが、その中で感情という問題がどうも振り落とされて、あまりそういうレベルの問題が解明されてこないのです。今日、いろいろな社会の問題などを考えていく上で、例えば子供の問題などを考えていくときには、人間の微妙な感情の問題が非常に重要な意味を持つてくるのですが、どうもそういうところに関しては、禅は弱いような感じがしています。

禅に限らず、仏教そのものが親子関係を重視していいともいえる。こういうと、やや違和感を覚えるひともいるだろう。現代日本の仏教には、葬式や墓地、お盆の先祖供養のイメージがあるからだ。しかし元来の仏教はそういうものではない。出家ということは、仏門に入ることとは親を含む家族との関係を断ち切ることだ。戒律のうえでは僧侶には男女関係を結ぶことが許されておらず、だれかの生物学的な親になることもない。

そう、やはり仏教も禅も親子のかかわり方の道しるべとなるものではないのだ。禅仏教の大家の大拙が、息子との付き合いに悩んでいたとしても、それが大拙の値打ちを下げることはないはずだ。むしろ、彼らの悩みを知りそこから学ぶことが、大拙とアランへのオマージュになるはずだ。

偉大すぎる親を持った子の苦悩、ままならぬ子を持った親の葛藤、「東京ブギウギ」の歌詞を書いた鈴木アラン勝を知ること、鈴木大拙をもっとよく知ること——情熱にかられて無軌道な行動をするドン・キホーテのような知の旅に、読者をしばしお連れしたい。